

フォークナーの人間像

花本金吾

I

フォークナーの二番目の作品『蚊』(Mosquitoes, 1927)の中で、作中人物の一人ジュリアスは、

Life everywhere is the same you know. Manners of living it may be different—are they not different between adjoining villages?...but man's old compulsions, duty and inclination: the axis and the circumference of his squirrel cage, they do not change. p. 243.¹⁾

人生は何処でも同じことさ。生き方は違うかもしれない。——隣り合っている村の間にも生き方の違いはあるじゃないか。——中略——しかし人間の衝動、義務、性癖といったもの、つまり人間という枠の中心点や範囲といったものには、変りはありはしない。

と述べている。この言葉が、フォークナーが未だ作家的使命感に目覚める前の、謂わば習作時代の記念碑に過ぎない作品の中に述べられているとはいえ、1962年に他界するまでの彼の長い人間追求の仕事は、この言葉の中に要約されとる思う。

いうまでもなく、彼は、自分の生まれ故郷たる深南部の真中に、「ヨクナパトウファ」という架空の州を定着の場として持った。そして二、三の例外を除くすべての作品は、その舞台なり背景として、この州を持っている。彼が如何にしてこの定着の場に辿りつくことができたのであったか、という問題については他の機会に触れたことがあるので、この小論では繰返さないが、彼が僥倖にもそこに辿りつけたことが、三十に近い長篇と夥しい短篇とを彼に書かせる衝動をかき立てた事実だけはいっておきたい。ヨクナパトウファ州は、もちろん、特殊な歴史と拡がりを持った、「局限」の世

界である。この局限の世界に、他の土地での出来事、例えばヨーロッパでの歴史の一駒、を投入することは、英国の景色を投入できないのと同様に、不可能であった。だから、前述の通り、二、三の例外を除いて、彼の作品に描かれる人物や背景はすべて南部のものである。

南部の縮図ともいえるヨクナパトウファ州の中で、この州を縦に貫いて流れる歴史と、横に広がる空間との、交錯の上に構成される「人生」のあらゆる断面を、フォークナーは、飽くことなく見つめつづけた。彼の目は、最初は当然のことながら、南部という特殊な世界が提起する個有な問題に向けられた。例えば、黒白問題とそれに伴つ離婚問題、現実に見る道徳的、倫理的、経済的、宗教的墮落と頹廢の相、こうした墮落と頹廢とを齎した原因の解明、そして南部救済への努力、等々。

しかし、こうした個有な問題が、本当には、人間そのものの本能的、情緒的、知的活動から出て来るところの、一表象にすぎないことを、フォークナーは長い創作活動の中で、徐々に認識するに至ったのだ。つまり、ヨクナパトウファという、可能な限り特殊な基盤を定着の場として持つことに成功した彼は、はじめ特殊な問題に係わり合いながらも、というより、それに係わり合うことを通して、徐々に「普遍」の世界に入っていくことができたのだ。1954年に書かれた『寓話』(A Fable)の中で、黒人牧師のサターフィールドをして、

Evil is a part of man, evil and sin and cowardice, the same as repentance and being brave. You got to believe in all of them, or believe in none of them. Believe that man is capable of all of them, . . . p. 184.²⁾

悪とか罪とか臆病とかは、懺悔や勇敢さと同じように、人間の一部分なのだ。その全部を信じなければならない。でないと、そのどれも信じられないのと同じなのだから。その全部が人間の力の中にあることを信じ給え。

といわせる時のフォークナーは、人間の何たるかを彼なりにいい得る地点

に到達していた、と僕は考える。「人間は耐えるだけでなく支配する」という、ノーベル賞受賞式での彼のあの有名な、人間不滅の信念は、長い、苦悩に満ちた追求の末に、彼が到達した結論なのであった。

彼がこの結論に達する経過に於いて、どういう問題を考えなければならなかったかを、僕はここで今一度整理して、彼が求め来った人間像を浮き彫りにしてみたい。

II

〈個人と歴史〉

『サートリス』(1929年)を書くことによって作家的使命感を持つに至ったフォークナーにとって、最初の困難で、そしてそれを解決することなしには先に進んでいけない問題となったのは、目に見ることのできない時の流れ——歴史の、現存する人間に及ぼす影響であった。 実の処、『サートリス』も『響きと怒り』(1929年)も、栄光と繁栄とに彩られた過去の力に押し潰されていく「現存」の人間の、いたましい敗北の姿が主題なのだ。 サートリス家もコンプソン家も、一樣に、誇らしい過去を持っている。 彼等の現実の零落が、自分達自身の力ではどうにもならない、遙かにもっと大きな力によって惹起された、南部全体の零落に起因していたとはいえ、そのことを認めることは、彼等にとって何の救いにも慰めにもなりはしない。 なぜなら、没落の原因が内存的なものであるにしろ、外存的なものであるにしろ、兎に角彼等が現実で没落していて、過去の基準に従って生きることが不可能であり、またたとえそれに従って生きようとしても彼等の現状ではどうにもならない、という認識が、彼等のフラストレーションの母体をなしているからである。 だから、彼等の過去の栄光が大きければ大きい程、現在の彼等の現実認識はそれだけ救いようのないものになるのだ。 もうずっと昔に死んでしまったサートリス大佐の亡霊は、彼が実際に生存し

ていた時に振った以上の力を、一家の上に及ぼす。現実には誇るべき何物をも持たない彼等は、惨めさから逃避する手段として、この過去の栄光のシンボルである大佐に愈々しがみつき、彼の印影を実際以上の大きなものにする。遂には彼を神格化し、伝統化する。だが、このようにして不当に神格化され偉人化された彼の陰翳が、今度は逆に、彼等の現実を一層悲惨にしていることを、彼等は明哲に理解することができない。彼等押し潰す得体の知れない魔力として、過去の力を受けとめるに過ぎないのだ。

処で、これ程に彼等の行動を規制し、大きな影響を与える過去——歴史——とは、一体どんな過去であったのか。現実の頹廢と物心両面における貧困とを齎した過去とは、本当にはどんな性質のものであったのだろうか。

これに対する本格的な解明のメスは、フォークナーがそれまでに係わり合ってきたすべての問題について総合的に考え直そうと意図して書いた作品、つまり、南部の過去と現実の諸相との間の有機的因果律をまさぐろうとした労作、『アブサロム、アブサロム!』(1936年)に至って、はじめて揮われる。この作品に至るまでに、彼は、『響きと怒り』の後で、『死の床に横たわりて』(1930年)、『サンクチュアリ』(1931年)、『八月の光』(1932年)、それに『標塔』(1935年)とを発表していた。『サートリス』と『響きと怒り』との中で、得体の知れない過去の魔力が現実の人々を破滅に追いやっていく過程を描いた時の彼は、紛れもない自然主義者であった。『死の床に横たわりて』の中に至って、そうした魔力に挑戦し、そして勝利を収める「現存」の人間の強さを、我々は漸く垣間見るようになる。そして、その次の作品『サンクチュアリ』に於いて、彼は一旦過去から訣別して、現代にはびこる諸悪の様相を大胆に描き出したのだった。『アブサロム、アブサロム!』(以後『アブサロム!』と略す)に至る頃には、フォークナーの心の中には、既に、過去と現実との間の因果関係を解明出来るという、一つの自信ができていたように思える。「現実とは過去の総合である。」とす

る彼にとっては、両者の関係は決して等閑に付せる問題ではなかった筈だ。

ウェスト・ヴァージニアの山奥に生まれて穢れを知らなかったトーマス・サトペンが、ヨクナパトウファ州のジェファソンに辿りつき、父の用事で近くの大邸宅に行ったのは、彼が 15 歳の時であった。彼は、そこで黒人の門番に「裏門から来い」といわれて、激しい屈辱感に身もだえする。そしてその挙句、彼は、いわゆるあの「大いなる計画」(The grand design) に到達するのだ。

So to combat them you got to have what they have made them do what the man did. You got to have land and niggers and a fine house to combat them with. p. 238.³⁾

あの男が俺に対してあんなことをやれたのは、彼がそうやれるだけの物を持っているからで、そうした連中に対抗できるためには、彼等が持っているのと同じ物を、すなわち、土地と黒人と立派で大きな邸宅とを、俺も持たなければならぬ。

これは、いってみれば、ひどく「イノセント」でありながら、しかし一途で危険な計画なのだ。その後の彼の一生は、彼がウォッシュ・ジョーンズの復讐の大鎌の元に倒れるその最期の日まで、この計画完成のために捧げられる。イノセントな彼は、自分が唯「勇氣」が十分にあり「聡明」でさえあれば、この計画は完徹されると信じて全力を尽す。にもかかわらず、すべては荒廃に帰し、大邸宅の焼跡の中に無気味なうめき声をあげる白痴の孫、ジム・ボンドだけが彼の計画の結果のすべてなのだ。南北戦役から帰還して自分の農場の荒廃ぶりを見た時、彼は、自分の計画が予定通りに進捗していないことに、一種の焦躁を感じる。そして、それを自分が十分に「勇氣」がなく「聡明」でない結果であると考えて、前にも増して一層黙々と働きつづけるのだ。イノセントな彼には、こうした悲惨な結果が、本当には、彼の計画そのものから惹起される必然であることが理解できない。つまり、彼の計画は、先ず、(一)、主人であり白人である自分の血をどこ

までも純粋な儘に保つこと、(二)、道具としての黒人を牛馬のように使って大農場を耕し、それによって自分の富の獲得をはかること、(三)、金持ちとしての体装と格式とレスpekタビリティとを保持するための、大邸宅とを必要としたわけなのだ。一口でいうならば、奴隷制度と土地私有制度との上に立つ富の獲得ということで、これはそのまま南部に於ける白人の富の獲得の形体に他ならない。この生活体系は、当然、黒白関係、黒白雑婚、白人の倫理感などの問題を提起するが、これらについては後で触れる。ここでいいたいのは、奴隷制度と土地私有制度という二つの大罪に彩られた過去の上に存在する南部の「現在」も、当然呪われたものであり、その呪いの故に南部は滅んでいく、という悲痛な認識をフォークナーが持つに至った、ということである。

この認識の中に、南部に生れかつ育ち、そこに強い愛着を持っている彼の二つの心の動きを、僕達は読み取るべきであろう。すなわち、一つには、白人が今まで犯し続けて来た罪の償いを、どういう形で、かつ、どのようにすべきであるかという、いわば一途にヒューマニスティックな動きと、南部の伝統的な生き方をその儘肯定しようとする、保守的なもう一つの動きとである。

この相背反する二つの心の動きがいかにして融合統一されるべきであるのが、その答えは『アブサロム!』には未だ出されはしない。精々、クエンティンに向かってシュリユーヴのいう言葉、すなわち、

I think that in time the Jim Bonds are going to conquer the western hemisphere. Of course it won't quite be in our time and of course as they spread toward the poles they will bleach out again like the rabbits and the birds do, so they won't show up so sharp against the snow. But it will still be Jim Bond; and so in a few thousand years, I who regard you will also have sprung from the loins of African kings. p. 378.⁴⁾

俺は、ジム・ボンド——白人と黒人とのあいの子——のような人間が将来、西半球全部を征服してしまう、と思う。もちろんそれは我々の時代にはそこま

フォークナーの人間像

ではいかないだろうし、又彼等が地球の両極に向かって拡がっていくにつれて、丁度白い雪と見分けがつき難いように兎や鳥が白くなるように、彼等も徐々に元の白さになってはいくだろうが、それにしたって矢張りジム・ボンドには違いない。従って数千年の間には、今君を尊敬しているこの俺もアフリカの王様の股から生まれて来たってことになるわけだ。

これに見るように、二つの心の動きの亀裂に陥って苦悩する作家の姿を見るだけにすぎない。

彼の中にあるこの背反律が統一されるためには、彼は更に書き続けなければならなかった。『モーゼよ、往きて下れ』、『墓場への闖入者』、『尼僧への鎮魂歌』、『寓話』などいわゆる後期に属する作品群を書いた頃のフォークナーは、既に「特殊」から「普遍」にむかう姿勢にあった。人間救済そのもの——創作現場の核心に踏み込んでいたのだ。それは、人間が、過去を含めて、様々な条件によって規制されて生きながらも、なおその中において「現在」に生きる個々の人間は各々に意志による選択の自由を持ち得ること、そしてその選択の自由が同時に未来をも規定していくこと、を彼がはっきりと認識するに至ったことを意味する。この認識に至った時、信条、種族、皮膚の色、身分などの違いから派生する問題は氷解しだした。

善悪両面の可能性を持つ個々の意志は、歴史によって常に規制されながらも、なお自由を持つ。そして自由を持つことによって、そのインテグリティを保つ。過去を拭き去ることは出来なくても、その圧力を超越することはできる。サルトルの「時間の首を切った」というフォークナー批評は、だから、前期のいくつから作品についてはいい得ても、決して彼の真髄をいい当てたものではないと考える。

〈黒白問題と雑婚〉

白人を凌駕する程の人口を持つ黒人の問題は、殊に南部という特殊な地帯においては、決してなおざりにできるものではない。今なお続く白人と

のいがみ合い、雑婚による混血問題などをフォークナーはどう受けとめ、更にそれを、どのようにして、あのノーベル賞受賞式で披露した人間不滅の信念にまで発展させていったのだろうか。

黒白問題が真正面から徹底的に追求され出すのは、『八月の光』、『アブサロム!』の時期に至ってからである。それまでの作品にも何人かの黒人が登場したが、彼等は一様に自分の身分とか行動の範囲とかについて、全くの疑いも不満も持っていない。置かれている儘の現状を当り前のことと考えているし、また白人もそうした彼等の考え方に慣れ切っている。従って両者の間には、使う者、使われる者という、調和のとれ秩序のある主従関係が見られた。処が、この調和のある関係は、『八月の光』の中で破壊される。そして『アブサロム!』では、両者の関係は、歴史的な立場にまで遡って分析され、多くの問題点が顕わにされる。両者の調和的共存が、突如として『八月の光』に於いて破られるのは、もちろんフォークナーがそれだけ視野の広い作家に成長したことを意味する。丁度その頃両者間のいがみ合いが特に多かった故に、こうした作品を書いたのだと見るのは皮相的でしかない。なぜなら、両者間の争いの本質的な原因は、白人が黒人を道具として使いはじめた建国時代の昔から、その儘の形で、現在にまで継続的に存在しているからである。

『八月の光』のクリスマスの悲劇は、白人は白人で、黒人は黒人で、各々全く互いに交流のない、独立した精神的風土を形成している処に発生する。この二つの独立した風土は互いに排他的、閉鎖的であり、同時に両者の間にはヒューマニズムという絆で結び合わすことの出来ない落差がある。人間の集合体対物体の集合体の関係であるからだ。クリスマスが果して自分の体内に黒人の血を持っていたかどうかは、作品からは判らない。だが持っていると自分で信じ込むことによって、彼はどちらの集合体にも定着の場を失ったのだ。各々の集合体は、その存続に最も応しい規範を持ってい

て、その規範は、集合体の構成員一人一人に有無をいわず、その遵守を強制する。人間は社会的動物である以上、社会の中に住まなければならない。(個人と社会との関係については後述する。)しかしクリスマスの場合には、彼が、その住む場所を失った結果として、生活のすべての規範を自身自身で造り出さなければならない。たとえそれが反社会的な性質の規範であったとしても…。彼の数々の悪事と殺人とは、彼自身の規範から出て来る必然であった。

彼の生涯が最も悲劇的である所以は、先にも一寸触れたように、白人と黒人との社会の関係がヒューマンイズムのレベル以下のものであったことによる。つまり、白人が人間であると同様に、黒人も人間であるという認識が、少なくとも白人の側により強くあり、その認識が彼等の社会規範の中でより強く作用していたとしたら、クリスマスの生涯はあれ程悲劇的ではなかった筈だ。彼は、黒白の二つの社会によって作り出された犠牲者なのだ。

処で、この二つの社会の間の落差を埋めつくし、ヒューマンイズムのレベルに持ち上げるためには、フォークナーは、どういう考えを持ち、かつそれをどういう人物に具現化しようとしたのであったか。

クリスマスは、最後にバーデンという恋人を持ったが、彼女がそうしたフォークナーの考えを具現する人物でないことはもちろんである。それ処か、彼女は、ある意味に於いて、クリスマス以上に哀れな犠牲者でしかない。北部生まれの彼女は、一家と共に南部に移り住む。奴隷所有を是としない、熱烈なユニテリアンの父の影響を受けて、彼女は秘かに黒人学校を経済的に援助したり、困った連中に助言したりして、一人淋しく生きる。彼女が漸く物心がつく四歳の時、祖父と兄が奴隷問題議論の末、サートリスに殺される。父は、夕闇にまぎれて二つの遺体を埋めた後で、四歳の彼女に向かって次のようにいう。

Remember this. Your grandfather and brother are lying there, murdered not by one white man but by the curse which God put on a whole race before your Grandfather or your brother or me or you even thought of. A race doomed and cursed for its sins. Remember that. His doom and his curse. Forever and ever. Mine. Your mother's. Your's even though you are a child. This curse of every white child that ever was born and that ever will be born. None can escape it. p. 190.⁵⁾

これからいうことはよく憶えておくんだ。お前の祖父さんと兄さんは、あそこに埋められているが、彼等はたった一人の白人に殺されたのではなくて、お前の祖父や兄や俺やお前が考えることも出来ない程ずっと昔に、神様が白人種全体にお掛けになった呪いによって殺されたのだ、ということ。白人種は犯した罪のために破滅の運命と呪いとを掛けられた人種で、この運命と呪いは、白人である俺やお前の母さんや、それから未だ子供であるお前の上を、いやお前だけではなく今までに生まれて来た子供やこれから生まれて来る子供など、すべての者の上を蔽っている、ってことを。誰一人としてこの呪いから逃れることはできない。

この言葉が、身を空しくして、黒人救済と白人の贖罪とだけに生きようとする彼女の人となりを形成したのだ。奴隷所有を許せない彼女が、南部の人々に受け入れられなかったのは当然であるが、彼女の本当の悲劇は、恋人として持ったクリスマスに黒い血があるかもしれないという疑念を、ついに超越できなかった処にある。つまり、黒人をも人間として認めようとする理想にも拘らず、自分の恋人が黒人であるかもしれないという現実を許すことができなかったのだ。彼女は、だから、北部のユニテリアニズムと南部の伝統的な考え方との両方によって、押しめされた犠牲者といえる。先刻僕が、ある意味で彼女はクリスマス以上に哀れな犠牲者である、といった所以である。

二つの社会をヒューマニスティックな絆で結びつけるためには、フォークナーは、『モーゼよ、往きて下れ』や『墓場の闖入者』に出て来るルーカス・ビューチャンを必要とした。彼は、白人キャロサーズ・マキャスリンが召使の黒人女に生ませた子供の後裔であるから、何分の一かの黒い血

を持っていることは、それまでの幾つかの作品の主人公と同じである。にも拘らず、彼はそれらの主人公のように反逆に生き甲斐を見つけないし、従って身を滅ぼしもしない。クリスマスが受けたのと同じ迫害や苦痛を、彼も白人社会から受ける。殺人現場の近くに偶々居合せたということだけで、犯人に仕立上げられもする。だが、彼は確実に自分の足で大地に立ちつづけているのだ。彼の強さは何処から来るのか。

彼は、先ず白人社会とその伝統的な考え方を、あるが儘の姿で認識する。彼はそれに対して迎合も反逆もしない。現実そこに存在するものとして、すべてを「耐え忍ぼう」とする。それができるルーカスは、自分を「黒人」として卑下することをしない。彼は、黒人も人間であることを自覚している。人間としての権利と威厳とを認識している。こういうタイプの黒人は、白人にとっても厄介な存在であり、同時に黒人社会にとっても危険な人物なのだ。従って、それだけに白人社会からの風当たりも強いし、黒人の間に友達もできにくい。払う犠牲はそれ程高いのだ。だが、それから得る結果もそれに比例して大きい。例えば、彼が「人間」として振舞うことで、白人の間に徐々に、友達とはいえないまでも理解者といえる人々を、何人かつくり出しはしなかったか。そうなのだ。チック・マリソンはその代表者の一人であり、弁護士のスティーヴンスもそうだ。彼等は、無口で孤高に見えるルーカスのゆるぎない行動を分析しているうちに、ルーカスも「人間」である事実を認識するに至った。そして、この認識は、ルーカスという、一人の混血児を超えて、黒人全般にまで広げられていく。『尼僧に捧げる鎮魂歌』の黒人女が白人にあれだけ強い影響を与え得るのも、また、『自動車泥棒』のネッドが白人に伍して強く生きるのも、黒人の方では人間としての自覚を持ち、白人もそれを認める処から生まれる、人間的な——ヒューマニティックな——関係によるのである。ここに至ると、人が白人であろうと、混血児であろうと、また純粋な黒人であろうと、問題

はなくなるのである。なぜなら、そうした様々な人種のあるのは紛れもない現実なのであるから、すべての人間が一樣に同じ「人間」であるという認識のもとに、その現実に「耐え」ていく以外に途はないからだ。

かくして、黒白問題とそれに伴う混血問題は一応解決したのであるが、しかしその結果フォークナーは、既成の社会通念に対して、数々の改善すべき点を考えなければならなかった。

〈個人と社会規範、宗教〉

人は生まれながらにして、大は国家から、小は家族に至る、数々の社会的環境と制約の中に不可避的に置かれる。人間は決して社会的であることをやめることはできない。そして各々の社会的単位は各々に特有な規範で以って、個人の自由に制肘を加える。だが、個人の意志や選択の自由は、社会に対して全く無力なのであろうか。歴史の魔力に打勝つことのできる人間は、社会に対して如何に働きかけるべきである、とフォークナーは考えたのだろうか。

一般に社会は、その保全を維持するために、成文化された法律と、風俗、習慣、伝統などの集合体である不文律とを、規範として持っている。個人がこの規範の中で、何らの矛盾も不自由さも感じずに生きていける限り、個人と社会との間に何の衝突も起らない。しかしながら、屍の如く生きる少数の人間を除く大多数の人間にとって、何らの衝突もなく生きることは殆んど不可能である。

『サートリス』のヤング・ベーカーも、『響きと怒り』のコンプソン一家も、彼等の栄光に満ちた過去が齎した社会的期待に副いえず、それが彼等のフラストレーションの原因となった。また、『アブサロム!』のサトペンは、『村』、『町』、『館』のいわゆる「スノープス」三部作の主人公フレム・スノープスと、共に、自己の生き方を、社会に認容されている伝統的

な生き方にコンフォームさせることによって、榮えようとしなかったか。彼等は自己の内的欲求を空しくして社会の伝統の中にもぐり込んだのだ。そこには、常に個人を征服することによって保たれる、保守的な社会の安定はある。そしてそこでは、個人対社会の関係は、常に追従と征服との関係であるのだ。とすれば、フォークナーが常に求め来ったあの倫理体系はどうなったのか、ということが当然問題になって来る。すなわち、人間の「意志」は、この関係の中でどう位置づけられるかという問題なのだ。

この問題を考えるためには、彼は、当然、社会が個人を追従させるものとして持つ規範が、本当に正しくそして真なるものであるか、という処にまで掘り下げて、考えざるを得なかった。そしてこれに対する答えとして、僕達は先ず『尼僧に捧げる鎮魂歌』の中の、あの難渋な中間章を思い出さないわけにはいかない。なぜなら、そこに、法律とか裁判所とかいった通常正義の砦と見做れているものが、実は極くいい可減な方法で作りに出されていった過程を読むことによって、社会の規範がまやかしに満ちたものであることを主張するフォークナーの姿を認めるからである。また、不文律でしかない風俗とか習慣とか伝統の中にも、無数の矛盾と不条理のある事実、フォークナーが多くの作品で繰返し述べて来たことだ。

個人の自由を拘束する社会条件がこのように矛盾と不条理に満ちていることを明確に認識した時、彼には、個人対社会の関係の中における人間の「意志」の位置づけ、というあの問題に取り組む用意ができた。そして彼は『寓話』を書いた。社会を代表するマーシャルと、個人の自由意志を代表する伍長との対決の中に、彼が求め来った、理想の、個人対社会関係が描かれる。

You and he together to be one in the saving of France, he in his humble place and you in your high and matchless one and victory itself would be that day when at last you would see one another face to face. . . . p. 270.⁶⁾

低い地位にいる彼と、最高の地位におられるあなたと一緒にフランスを救い、そして最後に二人が互いに顔を見合す日こそ勝利の日なのです。

すなわち、一方が他方を滅してしまう方がいいのではなく、相方が各々の立場を正当に主張し合い、認め合うところにはじめて正しい関係が成立する、と彼は考えるのだ。そのためには、個人は常に、ヒューマニズムを失うことなく社会を見守っていなければならない。とはいっても、これは確かに理想でしかあるまい。如何にヒューマニスティックであった処で、所詮個人は社会によって圧迫される運命にあるし、両者の間には決して一時的な和解もありはしないからだ。フォークナーもそのことを十分に認識している。だから彼が歴史は繰返すという時、それは、社会的条件の重圧に喘ぎ棲息の余地を狭められた個人の、ヒューマニズム回復への反復的運動を意味していることはいうまでもない。第二のキリスト（＝ヒューマニズムのチャンピオン）が必要であると同様に、第三、第四のキリストの出現の必要性を肯定することになる。

個人の社会に対する力は実に弱い。だが、一人一人の人間がヒューマニズムというレベルに立ち還る時、彼等は徐々にではあるがしかし確実に社会を変えていくことができる。そしてあらゆる苛酷な条件に喘ぎながらも猶人間性を失わない人間は実に多い。マーシャルに向かって伍長が、「でもまだ（12名のうち）10名残っている。」と繰返している言葉は、その儘フォークナーの確信でもあるのだ。

さて、僕は、なるべく簡潔に彼の宗教観をつけ加えなければならない。

彼にあっては、組織化され教義化された宗派は一樣に人間性を剝奪していくものとして捉えられている。つまり個人を圧迫する、あの社会的条件の一つなのだ。『八月の光』のクリスマスや『寓話』の伍長、あるいは『響きと怒り』の白痴ベンジーを、キリストになぞえたことで、フォークナーの宗教心の深さを認めようとする観方がよくなされるが、この観方は当然

正鵠を得ていない。彼等をキリストになぞえたのは、教義主義に陥り、硬化し、本来の意味のそれから墮落してしまった宗教を痛烈に批判しようとしたため、と見るべきである。彼等は逆説的に使われているのだ。

もちろん、このことは彼が宗教そのものを否定したことを意味しない。しかし彼の場合、「神」とは「ヒューマニズム」のことであった。彼は最後まで、人間救済をこの「ヒューマニズム」という枠の中で成しとげようとした。神秘主義の中にその根を持つ宗教には、だから、遂に彼自身も入れないのであった。⁷⁾

III

〈結論〉

彼の作品の中で繰返し用いられるあのリズム——すなわち、20世紀初頭には未だその儘であった広漠とした処女原野は近代文明の侵略と共に、徐々にその姿を消していく、にも拘らず、大地は変ることなくその息吹きを繰返す、といったリズム——は、所は変り、時代は移っても、人間はやはり人間に変わりはないということの象徴なのである。人間は、場所と時代の如何を問わず、人間の人間たる所以のものを持っている。そして僕達はそれを「ヒューマニズム」と呼べるのだ。それは善悪両方の可能性を含む。にも拘らず、というより、その故にこそ、人は、人間を制約する無数の条件——歴史、空間、社会、宗教等——の中に生きながら、なお意志の自由を持つ。選択の自由を持つ。そしてその自由に対して、人は「責任」を持つべきなのだ。「責任」をもって生きることは苦しい。それは選択の自由が齎す苦悩(苦悩以外には何も齎さない)に対して、「償い」(repentance)をすることであり、「耐える」(endurance)ことであるからだ。フォークナーの場合、「耐える」ことは、積極的な意味を持っていて、彼の宗教たる「ヒューマニズム」を支える一大支柱なのである。

条件と意志との葛藤の中に人は生きるとする彼の人間観に、僕は強烈な「実存主義」を読み取る、といったら失笑を招くだろうか。

(1965・8・13・山口県大島にて)

Notes

- 1) Mosquitoes: Liveright Corp., New York 1955.
- 2) A Fable: Chatto & Windus, London 1955.
- 3) Absalom, Absalom!: Chatto & Windus, London 1960.
- 4) Ibid. p. 378.
- 5) Light in August: Penguin Books 1960.
- 6) A Fable: Chatto & Windus, London 1955.
- 7) Cf. My Brother Bill by John Faulkner: Gollancz Co. London, 1964 p. 8
Bill had not belonged to any church. None of us has ever been a regular churchgoer, with the exception of my wife, my two sons and Jill.